

子どもの貧困に対して どのように対応すべきか



同志社大学 社会学部 教授
埋橋 孝文

研究の背景

近年、子どもの貧困に注目が集まっています。(ここでいう貧困とは、経済的なものに限定せず、健康や社会とのつながりなども含めています。)その理由として、①子ども本人には責任がないのにその「困難」を引き受けざるを得ないこと、②さらにそれがその後の世代にまで「継承」されていくことが挙げられます。子どもの貧困が学力だけでなく、社会的スキルやコミュニケーション能力を含めて不利な状況をもたらすことは、私たちの調査でも確認できました。

ではどのように対応すべきなのでしょう。実は、それに対してどのような対応策を講じるべきかについては、これまであまり議論されてこなかったといえます。本研究では、そうしたこれまでの研究のあり方への反省をふまえて、どうすれば親の貧困から子どもたちへの影響・連鎖を断ち切れるかを主として検討しています。

研究の成果

科研費の研究のように、ある程度の期間を費やすことができ、また予算的裏付けがある場合は、「自前のデータ」を得ることが可能ですし、それは必須といえます。そこで本研究では、①小中学生へのアンケート調査、②進路不安定新卒者へのアンケート調査、③母子世帯へのインタビュー調査、④養護施設職員・子どもへのインタビュー調査などを行っており、文献調査、量的調査、質的調査をミックスしているのが特徴といえます。紙面の都合上、本稿では④の調査結果の一部のみお示しします。

図は児童養護施設職員の自由記述で得られたテキストを分析した結果です。量的に分析・解釈するため、テキストマイニングソフト(KH Coder)を利用しました。図を見ると、退所後の生活課題は主に「仕事」に関する項目と「生活」に関する項目の2つに構造化できます。また、ネガティブな状態

を表すワードも多くみられ、なかでも「乏しい」「少ない」「不足」といったワードの頻度から、上のような課題には何らかが欠如している状態が関係していることが示唆されています。

現在鋭意集計、分析の真っただ中ですが、上記①～④の調査の大まかな成果をまとめると次の3点になります。

- 1) 親の貧困と子どもの貧困は重なることが多いが、後者は子どもの学力や友人関係や生活習慣にも影響をおよぼしており、それらを踏まえて「子どもの貧困」の独自の特徴を明らかにしたこと。
- 2) 子どもの貧困をもたらすリスクの高い「母子世帯」、貧困と関連する不利を被りがちな「児童養護施設の出身者」、「就職困難層」という3つの層に注目し、それぞれの実態を踏まえて、それらを支える人・機関・社会資源のあり方を提言したこと。
- 3) 親の貧困の各種影響を受けざるを得ない子どもたちも、青年期になれば「自立」していくことを要請されるが、その場合に、「貧困の世代間継承」を断ち切り、自立にふさわしい生活を営むことができるように、社会はどのような手立てを講じるべきかを、マクロ、メゾ、ミクロの各場面に分けて明らかにしたこと。

今後の展望

現在進めている調査の分析をまとめ、報告書の執筆に向けて鋭意努力中です。報告書をもとにして書籍の出版にまで到達したいと思っています。そうした研究成果のまとめでは、リアリティがあり、かつ、有効な「処方箋」を打ち出せるかどうかのカギになると思っています。

関連する科研費

平成23-25年度 基盤研究(B)「貧困に対する子どものコンピテンシーをめぐむ福祉・教育プログラム開発」

(単位:語)

仕事		生活		ネガティブ		社会的資源	
職場	10	生活	20	困る	11	相談	16
仕事	9	住居	6	乏しい	7	支援	8
就職	6	食事	6	トラブル	7	身近	4
就労	6	お金	8	少ない	5		
継続	7	金銭	3	難しい	5		
辞める	7	管理	5	不足	5		
		使い方	4				
		マナー	3				

図 児童養護施設職員の自由記述頻出ワード
問:児童養護施設を退所した児童にとって、退所後の生活でどのようなことが課題となると思うか(自由記述回答)

(記事制作協力:日本科学未来館 科学コミュニケーター 本田 とみ)